
桃色

OH林檎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桃色

【Nコード】

N0497L

【作者名】

OH林檎

【あらすじ】

いまだきめずらしい奥手の桃が出会ったのは、美しい准教授…。
さまざまな出会いの中で芽生えた気持ち…。
それは青春時代だからこそその甘酸っぱい感情。
家族や友に支えられながら少しずつ大人になっていく…。

ブローグく出会い01(前書き)

桃色は

FC2ブローグ恋愛小説(仮)で毎日連載中の処女小説です

ブローグく出会い01

ーブローグー

はらはらと舞う

桃色の花びらが

私の髪にも

頬にも

唇にも

よくきたね

って挨拶してくれてる…

ー出会いー

ホントはね、

受験勉強も面倒だったし
調理師の専門学校に行って、

将来は

母親の店を継ぐのもいいかなあ
って思ってたんだけど、

友達が薦めてきた学校の

案内パンフに載ってた

桜並木に惹かれて

つい（笑）受験しちゃった。

やっぱり、キレイなあ…。

この道を歩けただけでも
受験した甲斐があつたかも。

ここはカトリック系の学校だから
部外者はいれないんだよねえ。

それにしても

よく受かったなあ、

あれだけの受験勉強で（笑）

入学式当日、

店が忙しい母親は出席できないけど
こうしてぼんやりできる時間が
もてたのはラッキーだった。

あのせつかちな母親が隣にいたら
即効で並木道を通り過ぎちゃう（笑）

「おい、その一年。入学式始まるぞ。」

低く落ち着いた声が
どこからか聞こえた…。

その瞬間、

ざつと強い風が吹き

私の視界のすべてが桃色になった…。

出会い02（前書き）

桃色は

FC2ブログ恋愛小説（仮）で毎日連載中の処女小説です

出会い02

視界が開けた時、
最初に目に飛び込んできたのは
白…。

ん？

見上げると
ムツとした顔が…。

「う…。また花びらが口に…。」

嫌そうに花びらを取るその人は
髪が乱れに乱れた
長身の男性。

白衣って事はお医者さん？

「おい、いつまでもぼーっとしてないで、さっさと聖堂に行くんだ。」

「あっっ！は、はい！…！」

慌てて走り出した私に

「方向、逆だ。」

と指差す白衣。

「す、すいません!!!」

ぺこりと頭を下げ、
指差す方へ走り出す。

桃色に染まった
新しい世界へ…。

聖堂での入学式は

食物学科と

看護学科の合同入学式だった。

「も〜も!おっはよう!!!」

1時間ほどの式を終え
教室に向かう途中、
友達の愛未に呼び止められた。

「食物学科、女子ばつかだねえ。ウチの看護学科もだけど(笑)」

「愛未、よく見てるねえ。」

「大事でしょ!人間観察は(笑)」

北川愛未は小学生の頃からの大親友。

日本人離れした目鼻立ちに
サラッサラのロングヘア。

今日のパンツスーツは
愛未のすらっと伸びた手足に
よく似合っている。

勉強も運動も難なくこなす
いわゆる、

天に二物を与えられた人間で
ドジでノロマな私のお世話を
10年以上もしてくれてる。

進路について

はつきりしたビジョンを持ってなかった私に
この学校を勧めてくれたのも愛未だ。

「どお？良い感じでしょ、この学校。」

「うん…。まだ、分かんないけど、桜並木はステキだった。」

「はは。桃らしい感想だな。」

まあ、食物学科だったら桃の料理の腕も生かせるし
2年間で洋子ママの負担も軽くて済むし、
キャンパスライフもそれなりに楽しめるしで良いと思うよお。
私は3年あるから先に社会に出て待っててよ（笑）」

「愛未だったらお医者さまにもなれるのに、どうして看護学科選んだの？」

「偉そうな医者をやり込める看護師って、格好良くない?」

「えっっ!?!?偉そうなの…ってお父さんの事?ていうか、そんな理由なの!?!?」

「ふふふ(ー)(ー)」

(愛未、本気だ…。)

「さ、そろそろ行かないとね。教室でオリエンテーションでしょ?」

「うん。」

「終わったら洋子ママのと一緒に行くから。」

「わかった〜!」

「じゃあ、桃!しっかり友達作んなさいね!」

「う、うん…。」

愛未は

黒髪をなびかせて

違う棟の教室に走っていった。

友達かあ…。

あんま、自信ないなあ…。

不安な気持ちのまま

食物学科がある棟へと足を速めた。

出会い03 (前書き)

桃色は

FC2ブログ恋愛小説(仮)で毎日連載中の処女小説です

出会い03

「え〜〜〜っと、あ行かな行まではAクラスだからあ（汗）」

愛未と別れてから、

構内の案内図片手に、うろろろすること数分…。

「あ〜〜〜んっっ！いきなり、遅れちゃうよぉー！ー！」

「うん。遅れちゃいそうだね。」

「えっっ！？」

「じゃ、ちょっと急ぐっか」

突然後ろから現れた、

ふわっふわの髪の毛の子が…

手を…

手を…

手を…

「きゃあっっ！…！！…！！…！！」

お母さん、桃は知らない殿方に手をぎゅってされてますけど？

「あ、ごめん。君が困ってたようだったから。でも、遅れるよりい

いでしょ？さあ、走るよ！」

そんな極上スマイルで言われてもあ！？

ええええええええー！！！！！！！！

「それでねつつつ！それでねつつつ！」

「桃、ちよつと落ち着いて！」

「そうよお。たかが手を握られたぐらいで。」

「もあ！！！愛未もお母さんも真剣に聞いてよあ！！！！」

放課後、

母・洋子が営む『ママの店』で

今日起こった私にとってはすごい事件の事を話してるんだけど、二人とも全く相手にしてくれない…。

あの後、

ふわっふわの男の子は

私の手を握ったまま教室に入り、

「はじめまして！僕の名前は中村優太！で、君は？」

「し、白石桃…。」

「桃ちゃんか。かわいい名前だね　という事で、みんなヨロシクね
！」

と、これまた極上のスマイルで
二人分の挨拶をやったのけた。

クラスみんなはぼか〜んと口をあけたまま、
男の子と私の二人を交互に見て…。

「いや〜〜ん!!! 思い出しただけでも気絶しそう!!!」

「ふ〜ん。ふわっふわで極上スマイル…。そんな子、式にいたっけ
？」

「遅刻したんだって。で、急いで教室に向かったら私がうるうる
してたらしいよ。」

「桃、嫌がつてる割にはよくしゃべってるじゃない？」

「違うよお！優太くんが勝手にしゃべってきただけだよお！」

「優太くん？桃が男の子を下の名前で呼ぶなんてめずらしい！」

「お母さんまで変な事言わないでっ！ただ、優太って呼んでって
言われたから…」

「うんうん。洋子ママ、これはかなり良い傾向だね！」

「そうねえ。桃は男性に対しての免疫ゼロだから。お母さんなん
て桃ぐらいの年の頃は…」

「お、お母さんっっ!!!!」

「出たっっ!洋子ママの武勇伝(笑)」

「やめてえええ!!!!」

「愛未ちゃん、桃の前ではこういう話ご法度だから、また二人の時にね」

「は~~~~い」

「じゃあ、今から入学祝いにふわっふわのオムライス作ってあげる!愛未ちゃんも食べてくでしょ?」

「モチロン!洋子ママのふわっふわは最高だもんね!」

「…二人とも私の事からかってる?」

「ぜんぜん!」

「ぜんぜん!」

…顔に出ていますよ。

「よしっっ!昨日の事は忘れよう!今日からのスタートと思って…」

気合を込めて教室のドアを開けると

「おはよう 桃ちゃん」

早速、会っちゃいました…（涙）

「お、おはよう…勇太くん…」

「今日も良い天気だね！」

ていうか、優太くん、

クラス中の女子に囲まれて、何をしてらっしゃいます？

「じゃあ、次はみさきちゃんね はい、送信！」

「ありがとう！」

「こちらこそ！何かあったらいつでもメールしてね」

「うんっっ」

「おまたせ！次はあいちゃんね 携帯、こっち向けて。」

「あ、あの…優太くん？」

「桃ちゃんも携帯出しといてね！」

「へっっっ？」

「アドレス交換しよ？」

朝から完璧なスマイル、ありがとう…

この聖マリアンヌ短期大学は

食物学科と看護学科から出来ていて、

広大な敷地内には

聖マリアンヌ医科大学と

聖マリアンヌ医科大学病院も併設されてる。

食物学科は

栄養士、調理師、フードコーディネーターと

将来の選択肢は色々みたい。

A、Bクラスとも、ほぼ女の園状態で

このクラスの唯一の男子は

あそこで女子に囲まれてる優太くん。

とりあえず、昨日のことを気にしてる人は

いないようだから良かったけど、

あそこには入っていけないなあ…。

その日のお昼休み、

教室で一人お弁当を広げてたら

愛未が様子を見に来てくれた。

「桃、ひとり？」

「うん。」

「…優太くん、
女性はお墓に入るまで女性！僕は女性にはどこまでも優しい男だ
よって言ってた。」

「ある意味デカい男じゃん！」

「うん。だから、昨日の事もホントの親切心だったんだなあって。」

「友愛だ、友愛。桃にはちょっと残念だったけどね（笑）」

「そ、そんなことないよお！…！」

「まあ、桃はそのぐらいから始めた方がいいかも。」

「？」

「まずは男の子の友達を作る！で、免疫が出来たら恋をする！」

「…！！！」

「なんだか楽しくなりそうねえ」

「…私は嫌な予感がするう。」

お昼休み終了間際、
友愛精神に満ち満ちた優太くと

ソレを囲む会員さん達が戻ってきた。

「桃ちゃんも来れば良かったのに。」

と優太くんが声をかけてきたけど、

「う、うん…。また今度…。」

顔さえまともに見れない。

こんな私が男の子の友達作るって

無理だよ、愛未〜！

でも、私のそつけない態度も全く気にならないのか、

「ねえねえ。桃ちゃんは今日のサークルオリエンテーション参加するの？」

と、話を続ける。

サークルオリエンテーションは

各サークルが新入生獲得の為にを行うイベントで参加は自由らしい。

愛未は

「実習が入ってかなりハードになるだろうからサークルはやめとくわ。」

って言ってたし、

私も学校が終わったからお母さんの店を手伝おうかと思ってて
サークルはいいかなあと…。

「良かったら、一緒に行かない？」

「え？」

「このクラスできちんと話せてないの桃ちゃんだけだし、
また昨日みたいに構内で迷っても困るでしょ？」

たしかに…

それぞれが色々な場所にある

サークルの勧誘ブースを見て回る形式なので
未だに構内の配置を理解してない私には大変かも知れないけど…。

「でも…サークル入るって決めてないし…。」

「見るだけ見て、気に入るのが無ければ入らなければいいんだし！」

「…」

「ねっっ？僕がナビするからっっ！」

…結局、押し切られちゃいました。

先生がオリエンテーションの説明をする間、
斜め前に座ってる優太くんをそっと思ってみる。

あの髪はパーマかな？

茶色くてふわっふわで…

「…プードルみたい。」

とつぶやいた途端、優太くんが振り返った。

「!?!?」

「さあ、桃ちゃん。行こうか」

はじめての…01 (前書き)

桃色は

FC2ブログ恋愛小説(仮)で毎日連載中の処女小説です

はじめての…01

「桃ちゃん、見たいブースある？」

「特には…。」

つて答えたら、

旅行サークル、

テニスサークル、

ゴルフサークル、

スキーサークルetc…

と引っ張られるようにブースを回った後、
中庭でひと休みすることに。

「桃ちゃん、気に入ったのあった？」

「…ううん。優太くんは？」

「全部かなあ。」

「え？全部？」

「うん。今までの全部入るうづかなって。」

「そんなに時間あるの？」

「無いけどさ（笑）在籍するだけでも女の子と知り合いになれるしね。」

「もちろん、都合が会えば活動にも参加するよ。」

「そういえば、どのサークルも女の子多かったな。」

「引いた？」

「…ちよつとだけ。」

「はは。正直だね（笑）」

「ごめんなさい。」

「桃ちゃん、僕ね。」

「優太くんはキラキラした瞳で語りだした。」

「将来、カフェを開くのが夢なんだ。」

「カフェ？」

「そう。心と体に優しい物を提供して女の子を笑顔にする店。」

「その為に栄養学を学びたかったし、」

「たくさんの女の子と知り合って、」

「気持ちを理解したかったからこの学校に入ったんだ。」

「そう言っと、まっすぐ私をみつめて…」

「プードルも色々考えてるんだよね。」

「き、聞こえてたの!？」

「ばっちりね」

「ごめんなさーい(泣)」

「店の名前プードルにしようかな(笑)」

「う。。。」

「それでは、桃ちゃん。まだまだブース回るから、僕についてきてワンっっ!」

「はいっっ!!!!(滝汗)」

優太プードルは結構イジワル?

優太プードルの後をちょこちょこついて回るうちに

(逆さんぽ!?)

少しずつ緊張が解けてきて、フツーに話ができるようになった。

とつてもイケメンさんなのに

どこか男臭さを感じさせない中世的な雰囲気があるから

男の子と話すのが苦手な私でも大丈夫みたい。

「へえ。桃ちゃんちは飲食店なんだ。」

「うん。ママの店っていうカフェレストなの。」

「今度、行ってみていい？」

「ホント？今どきのおしゃれな店じゃないよ？」

「別におしゃれな店がいい店とは限らないよ。」

「僕が考えるいい店の定義は人にあっただかい店ってこと。」

「だったら大丈夫かなあ。」

「娘が言うのもどうかと思うけど、あつたかくて美味しいもん。」

「そっか！楽しみだな　で、そのお店はお母さん一人でやってるの？」

「うん。」

「じゃあ、お父さんは、外でお勤めかな？」

「ううん。いないの。うちは母一人子一人の母子家庭。」

「そっか……。」

「うん……。」

優太くんはそれ以上は何も言わなかった。

優しい人なんだね。

「優太くんちは？どんな感じ？」

「うち？うちは一般的な中流家庭。」

「？」

「父はサラリーマンで母は専業主婦で僕は一人っ子。」

「そっか。一人っ子ってところは一緒だね。」

「うん…。」

優太くんは少し考えるように間を開けた。

「優太くん？」

「ねえ、桃ちゃん。良かったら今度、遊びに来る？」

「え？」

「友達になった記念にお互いの家を家庭訪問（笑）」

「友達？」

「そう。友達。」

優太くんはふんわり笑ってそう言った。

私も自然に笑顔になった。

「うん！」

愛未、わたし友達できたよ。

しかも、

プードル似のイケメンさん（笑）

私にはお父さんがいない。

生まれたときにはいなかった…らしい。

お母さんには辛い思い出なのか、

お父さんのことはほとんど口にしない。

私が小さい頃、

お父さんはどこにいるの？

って困らせた時、

桃っていう名前はお父さんが付けてくれたのよ。

って教えてくれた。

その時のお母さんの顔、

とってもとっても辛そうで、

それからお父さんのことで困らせることは無くなった。

でもね、

ほんとうはずっと知りたかった。

お父さんはどんな人なのか…。

私はどうしてうまれてきたのか…。

私は…

あいされていたのか…。

「桃ちゃん、ここが最後だよ。」

と、優太くんは廊下の一番奥の教室を指差した。

「ここは、何のサークル？」

「国際交流だよ。桃ちゃんも見てみる？」

「うん。日本語も苦手なのに国際交流なんて絶対無理！」

「そう？（笑）」

じゃ、すぐ戻ってくるから、ちょっとだけ待っていてくれる？」

「うん。」

優太くんは教室の中に消えていった。

はじめての…02 (前書き)

桃色は

FC2ブログ恋愛小説(仮)で毎日連載中の処女小説です

はじめての…02

この棟は他と違ってずいぶん静か。

夕方のオレンジ色の日差しが当たる廊下を
ぶらぶらと歩いてみる。

教室をのぞくと、

ほとんどが机とイスが並んだだけの無人教室だった。

国際交流しかブースがないのかも。

と最後の教室をひよこつとのぞいてみると…

何も無い空間にイーゼルが一台。

なんだろう？

吸い込まれるように教室に入り

イーゼルの前に立った。

その上には

1枚の写真パネル…

一面…

桃色の花びら…

どくんっっ！

胸が

ざわざわする…。

その時、

「何だ？入部希望者か？」

聞き覚えのある低い声がした…。

「他の奴らは帰ったのか…。相変わらず、熱意が無いな。」

「…。」

「入部はかまわないが、存続も危ぶまれてるような部だぞ。」

「…。」

「おい。聞いてるのか？」

聞こえてるよ。

聞こえてるけど…。

「…お前、泣いてるのか？」

大きな背を屈め、私の顔をのぞきこむ。

「わ…たし…、やつ…ぱり…泣い…てます…か？」

「そうだな。その顔は笑ってる顔じゃない。」

そして、手のひらで

私の涙をぐいっとぬぐった。

「なっつ！？」

びっくりしてさらに硬直する。

「昨日は笑ってたのに、今日は泣いてる。
入学早々、忙しいヤツだ。」

「あつ！昨日の？」

聞き覚えがある声だと思ったら、
桜並木で会った白衣の男性だった。

眼鏡、

かけてたんだ…。

昨日はよく見えなかったけど
すっごくきれいな顔…。

そう認識した途端、

頬が赤く染まっていくのがわかった。

そ、そんなことよりお礼を言わなくちゃ！

と急いで頭を下げようとしたら…

「これを見て泣いたのか？」

そう質問されて、タイミングを失った。

「え〜っと。よく、わかりません。なんだか自然と…。」

「そうか…。」

そう言うと、

パネルとイーゼルを抱え、

教室から出て行くこととする。

「あ、あの…。」

「明日また来るといい。部長に言うておくから。」

「いえ…あの…私は…。」

うまく言葉に出来ない。

そして、
戸口まで来たとき、

「二人目だな。これを見て泣いたのは…。」
つぶやき程の小さな声だった。

教室に一人残された私は
今起こった出来事が
頭で整理されなくて
ぼろっと立っていた。

「桃ちゃん、ここにいたの？探したよ！」

優太くんの声でゆっくりと覚醒していく…。

「明日…。部長…。入部!？」

「桃ちゃん？」

「ゆ、優太くん!ここってどこのブースだったの?」

「写真部だけど?どうかした?」

「写真!?!どうしよう!!!私、入部希望者に間違われちゃった!」

「いいじゃん、写真部」

ファインダーをのぞく女の子っていい感じだよ
桃ちゃん、写真、好きだったんだあ！」

「…ううん、まったく。」

携帯カメラすらまともに扱えたことないし。」

私の説明が下手っぴだから、

優太くんは訳がわからないって顔してる。

「よくわからないけどさ。入る気無いなら、断ればいいんじゃない
?」

「そ、そっか。そうだよね！」

「うん。何なら明日も連れてきてあげるよ。」

いいよ、そんなの! って言いたいけど…

「桃ちゃん、ここまで来れないんでしょ? (笑)」

凶星!

オレンジ色の教室には
いつのまにか

夜の蒼さが混ざっていた。

涙は、
もう乾いていた…。

はじめての…〜二ノ宮side〜(前書き)

桃色は

FC2ブログ恋愛小説(仮)で毎日連載中の処女小説です

はじめての……二ノ宮side

昨日は、朝まで研究に没頭していて
入学式に遅れそうになっていた。

今年は短大の方で病理学を教えることになり、
式典関係は出席するように

(しつこいほど)言われていたが、

全く持って気が乗らない……。

俺は教師じゃない。研究者だ。

ハゲ教授に訴えたが、右から左に流された。

なにか

「頼むよお、二ノ宮くん。」
だ！

この2年、心血を注いできた研究が
あともう少しで形になるって時に……。

あの野郎……、わざとだな。

唇に触れてくる花びらにさえ怒りを感じながら
桜並木を急いでいた。

あと5分で始まる。

ちらりと腕時計を確認して足を速めた時、桜を眺めている女生徒らしき姿が見えた。

かなり幼い。

新入生だろうか？

桜を見上げ…

微笑んでいる。

「おい、その一年。入学式始まるぞ。」

声をかけたその時、強い風が吹き

俺も

その子も

一瞬にして花びらに包まれた。

唇についた花びらを取っていると

かなり下の方に俺を見上げる視線を感じた。

小さいな。

ほんとに大学生か？

入学早々遅刻じゃかなり目立つぞ。

「おい、いつまでもぼーっとしてないで、ちっちと聖堂に行くんだ。」

そう、注意すると

「あっつ！は、はい！…！」

慌てて走り出した…

思いっきり逆の方向に。

「方向、逆だ。」

聖堂の方向を指さす。

「す、すいません…！！！」

頭を下げ、走っていった。

おいおい。大丈夫かよ。

呆れ半分で後ろ姿を眺めていた俺は

…遅刻した。

オレンジ色の日差しの中、

写真部のブースがたっている教室を目指していた。

入学式に遅刻した俺は、
案の定教授に嫌味を言われ、
廃部寸前の写真部のお守まで命ぜられた。

高校のころ、部に所属していた事もあり、
写真は嫌いじゃない。

しかし、この十数年、
意識して距離を置いていた。

この俺が写真部の顧問とは…、

「皮肉なものだな…。」

午前中、医学部3年の部長に会い、
部員数も少なく、
団体での活動もほとんど無いと聞いて
若干気が楽になった。

なるべく関わりたくはない。

大抵の事は許可を出すから、
俺を巻き込むなと釘を刺しておいた。

構内の一番西側の
ほとんど使われていない棟にブースがある。

もつといい場所を下さい！

なんて言い出す部員は一人もいなかったようだ。

教室に入ろうとした時、

人の気配を感じた。

部員が残っているのかと中をのぞくと、

中央で立ちすくんでいる生徒の姿があった。

「何だ？入部希望者か？」

折角の入部希望者だというのに

肝心の部員はいないらしい。

「他の奴らは帰ったのか…。相変わらず、熱意が無いな。」

新入部員が入ろうと入るまいとどうでもいいのか？

ブースがたてられるのは、

今日と明日の二日しかないというのに…。

「入部はかまわないが、存続も危ぶまれてるような部だぞ。」

こんな部じゃ入る生徒も迷惑だとそんな言葉が出た。

「…。」

返事が無い。

「おい。聞いてるのか？」

一人でしゃべっている空間がたまらず
女生徒の顔をのぞきこむと
頬に涙が伝わっていた。

「…お前、泣いてるのか？」

この生徒、どこかで…

「わ…たし…、やつ…ぱり…泣い…てます…か？」

幼さが残る顔でそう言った。

そうだ。

昨日の遅刻の元凶だ。

彼女は声も出さずに
ただ、涙を流していた。

「そうだな。その顔は笑ってる顔じゃない。」

昨日の事もあり
なんとなく軽く口をたたいた。

そして、自分でも驚くほど自然に
手のひらで涙をぬぐっていた。

「なっっ!?!」

彼女はびっくりして青くなった。

「昨日は笑ってたのに、今日は泣いてる。
入学早々、忙しいヤツだ。」

「あっ! 昨日の?」

俺と認識した途端、

涙で濡れた頬が

桃色に染まっていく…。

青くなったり

赤くなったり

大変だな。

妙に感心しながら

彼女の後ろに視線を移すと

イーゼルに置かれた1枚の写真パネルが…。

!!!!!!

なぜ、これがここに!?

あるはずのない写真がそこにあった。

押し寄せる記憶の波に
立っているのも苦しくなる…。

「これを見て泣いたのか?」

彼女にそう問いかけることで自分を保とうとしていた。

「え〜っと。よく、わかりません。なんだか自然と…。」

「そうか…。」

そう言うのがやっとだった。

落ち着くどころか

彼女のその答えが俺をますます追いつめていく。

パネルとイーゼルを抱え
教室を去ろうとした時、

「あ、あの…。」

小さな声がした。

そうだ、入部希望者だったな。

「明日また来るといい。部長に言っておくから。」

「いえ…あの…私は…。」

何か言いたそうだったが
早くこの場から消えたかった。

彼女のあのまっすぐな瞳…

あれはあの時の…

「二人目だな。これを見て泣いたのは…。」

屋上に上がり、
煙草に火をつける…。

空はいつの間にか
夜の闇に浸食されていた。

広がる世界01（前書き）

桃色は

FC2ブログ恋愛小説（仮）で毎日連載中の処女小説です

広がる世界 01

「桃ちゃん、ごめんね。」

さつきから優太くんがしきりに謝ってくる。

「僕が色々連れまわしたから、かなり遅くなっちゃったね。お母さん、心配してるんじゃない？」

「ううん。大丈夫。うちは放任主義だから。」

とは言ってみたけど、愛未と一緒にいるとき以外、こんなに遅くなった事がないから正直わからない。

「危ないから、送っていくね。」

「ええ！？いいよお！近いから大丈夫。」

「ダメ！女の子一人で帰せないよ！！！」

結局また押し切られちゃうのね。

「ただいまあ…。」

「あつ！桃、おかえり！」

「おかえり。今日は遅かったわね。」

「…愛末もいたんだ。」

「なあに！その言い方！！いちや悪い？」

「そ、そうじゃなくって…。」

「何してんの？桃。早く入んなさい。」

「う…ん…。それが、ね…。」

「こんばんは」

私の後ろから例の彼が…

「!?!」

「!?!」

「桃さんと同じクラスの中村優太です。」

今日は遅くなってスイマセン！」

と言ってぺこっとお辞儀をした。

二人は突然あらわれた彼を見て

「あゝ！ふわっふわだあああ！！！！」

「あゝ！ふわっふわねえええ！！！！」

って思いっきり指さした！

なぐんてすばらしいハモリ！

じゃなくてえ！！！！

人に指ささないっつ！！！！

優太くんは

なあに？って首をかしげながら私の方を見るけど

ここは笑って誤魔化すしかないっつ！！

「君が例の優太くんね。はじめまして！桃の母の洋子です。」

「私は看護学科の北川愛未。桃の幼なじみ。」

「どうも。はじめまして。突然おじゃましちゃって…。」

「いいの、いいの！そもそもココ、お店なんだから突然来るもんだし（笑）」

「って、愛未ちゃんが言うのおかしくない？」

あははは~~~~！！！！っつて

3人さん、

私そっちのけで盛り上がり過ぎです！

優太くんは

お母さんにも

愛未にも

この店にも

いとも簡単に馴染んでみせた。

お母さんはともかく

愛未が簡単にガードを外すのはめずらしい。

私みたいに人見知りではないけれど、

その人がわかるまで距離を置いて接するクセがあるから。

「ねえ？優太つてさ、彼女いるの？

クラスでも囲まれてたって聞いたけど？」

ま、愛未さん！

いきなり突っ込み過ぎじゃない？

しかも、優太つて！

「ううん。いないよ。僕は特定の子は作らないんだ。」

「どうして？すごいイケメンなのに、もったいない！」

お母さんまで参戦するっつ！？

「そつだなあ……。世の中の女性すべてが彼女つて事かな？」

「なんだあ、それー！！」

「言つわねえ！」

ウケてます…。

それから優太くんは

あのふわっふわオムライスを食べ、

「すっごくおいしいっ！」

を連発してお母さんを最高に喜ばせた。

優太くんが帰った後

「いいヤツじゃん、優太！」

大切にしなよ、はじめて出来た男友達なんだから。」

って愛未に言われて

私も最高に嬉しくなった。

広がる世界02（前書き）

桃色は

FC2ブログ恋愛小説（仮）で毎日連載中の処女小説です

広がる世界02

次の日の午後、
優太くんのナビで
写真部のブースがある棟に向かった。

「桃ちゃん、結局どこのサークルにも入らないんだ。」

「うん。サークル活動ってお金かかりそうだし、
特にこれっていうのも見つからなかったし、
帰ってお店の手伝いでもしよっかなあって。」

「そっか。やってみれば楽しいって事もあると思うけどね。
とは言っても、僕もバイトで忙しいんだけどさ。」

「バイト？」

「そう、バイト。週6で駅前の居酒屋。」

「週6も！？駅前の居酒屋って朝までやってるところだよな？」

「うん。5時まで。毎日、朝帰りだよ（笑）」

「体…大丈夫なの？」

「カフェの開店資金貯めるためだからね。
それに僕は見かけよりタフなんだ。」

優太くんはかわいくウィンクした。

「今度愛未ちゃんとおいでよ。サービスするからさ
フードメニューもソフトドリンクもいっぱいあるし。」

「…その話したら、お母さんもきちゃいそう。」

「もちろん、大歓迎！」

「っと、着いたよ。ここが写真部のブース。」

「…う、うん。」

「一緒に行くから、緊張しなくていいよ。」

「ありがとう…。」

いつの間にか優太くんが素直に甘えてる自分がいる。

お兄ちゃんって

こんな感じなのかなあ？

同い年だけど（笑）

写真部の部長さんは
なんていうか…

不思議な（世界の）人だった。

「あの…入部は…」

まで言つと

「ああ、しないよね？だと、思った。」

と、

怒りもせず

笑いもせず

私も見ずにそう言った。

ただ、

となりに立ってる優太くんを
じーっつと見てる。

「はは。拍子抜けだね。じゃ、行こっか。」

つて、優太くんが言った途端、

「君は入るよね？」

と、態度豹変。

「君、名前は？」

二ノ宮は女子だけって言ってたけど、昨日も来てたの？

ああ、残っておけばよかったな。

どうせ、ろくなヤツ来ないし、帰ったんだよ。

君みたいなかわいいコなら大歓迎さ！」

こ、これは、もしや！…！

「あ、あの…僕は付き添いで…」

「そうなの？」

「じゃあ、モデルやらない？服着ててもいいからさ
ああ、その女子、もう帰っていいよ。」

優太くん、青ざめてまーす。

命辛々、逃げてきた私たちは、
とりあえず構内のカフェに落ち着くことにした。

「部長さんって、あっちの世界の人？」

「そうみたいだね。本気で喰われちゃうかと思ったよ。」

「優太くん、かわいいもんね。」

「桃ちゃん。男にかわいいは褒め言葉じゃないよ。
それに桃ちゃんの方がよっぽどかわいいし。」

「／／／／／／」

「ねえ。走ったら喉乾いちゃった。何か飲もうよ。」

まだ、ときどきが治まらないのに涼しい顔で歩き出す。

優太くんも十分、

不思議な人…。

ここのカフェは大きい学校だけあって
すごくキレイで充実してる。

（しかも、お安い）

私はホットのソイラテ、

優太くんはアイスのオレンジティを注文した。

「持って行くから、席取つといて。」

「うん。」

ぐるっと見渡して

中庭が見える、窓際の席に向かった。

その時、

「部長には会ったのか？」

あの声に呼び止められた。

一斉に女生徒の視線が集中したのがわかった。

目の前のこの人に…。

「あ、はい。会いましたっつ。」

「そうか。」

「……………」

き、緊張して…
頭まっしろ…!!

視線も痛いし！

「じゃ。」

あ…

行ってしまっつ。

緊張して何も話せないくせに、
なんだろ…、
この気持ち…。

はじめてのモヤモヤした気持ちに戸惑いながら

広い背中が遠ざかっていくのを見ていると、

「!?!?」

急に立ち止まり、振り向いた。

気持ちを見透かされたような気がして
耳まで赤くなる。

「お前、名前は？」

「え？」

「名前だよ。」

「し…」

「白石桃ですけど、何か？」

トレーを持った優太くんが
となりでそう言った。

優太くん、
笑ってるけど…

いつものスマイルじゃないよ？

「ナイト登場か。」

私と優太くんをちらっと見て
…行ってしまった。

「何?どうしたの?」

「えっ…と。」

昨日、あのブースで会って…たぶん写真部の顧問だと思う。」

何だか、しどろもどろになってしまっ。

「そっ…。」

「優太…くん?」

「あっ、ごめん。」

今度は桃ちゃんが食べられちゃうんじゃないかと思っ。

「えー…!?そんなんじゃないよー…!」

私はブンブンと手と頭を振って否定した。

「なら、いいけどさ。でも…」

優太くんは私の頬をつんつとつついて、

「顔、赤いよ。」

と、真顔で言った。

「え！？走ったからだよ！」

ホントは違うとわかってて、
必死で言い訳をならべるけど
優太くんは心の奥を読むように私をじっとみつめてる。

居たたまれなくなってうつむいていると、

「桃ちゃん。お茶しよっか？」

と笑顔で言ってくれた。

よかった。

いつもの優太くんだ。

それから小一時間、

お茶しながらいっぱいおしゃべりしたけど
優太くんはときどき上の空…。

私も…

眼鏡の奥の瞳を思い出していた。

広がる世界〜二ノ宮side〜（前書き）

桃色は

FC2ブログ恋愛小説（仮）で毎日連載中の処女小説です

広がる世界〜二ノ宮side〜

「佐伯教授。」

やっと、つかまえたぞ。

昨日、俺に写真部を押しつけて以来だ。

「あきらかに逃げてますよね？俺から。」

「何、馬鹿なことを言ってるんだ。

私が君から逃げる理由なんてないよ。

かわいい教え子の恭一郎くん。」

「と、言いつつ出て行くことするのはなぜですか？」

ここは、大学院内にある病理学研究室。

で、この目の前の

俺から逃げたそうにしている人物は佐伯教授。

ハゲてはいるがこの世界で知らない者はいない。

「これ、教授でしょう?」

俺はあの写真パネルを差し出した。

「しーーーーらんよーーーー。」

それを人は

動揺してると言うんだ!

「この存在を知っている人物はあなたしかいません。」

今日は冷静に問い詰めようと決めていたが…

「う、宇宙人が来て置いていったんじゃないのかなーーーー?」

ブチっっつ!!!!!!!!!!!!

何かが切れる音がした…。

今朝それとなく、

部長の新田に聞いてみたが、

「写真パネル?」

昨日のあの時間にはすべて回収してたはずですよ。」

と言っていた。

大体、新田がこの写真のことを知ってる訳がない。

「佐伯教授…。」

もう一度息を整えて、意図的に抑えた口調で詰め寄る。

この人にはこれが効果的だと長年の付き合いでわかっていた。

「いい年をして、どうしてこんないたずらをするんですか？」

「いたずらじゃない。虫干しだ。」

吐いた…。

「たまには出してやらんといかんだろー？（笑）」

「…の、ハゲ…」

俺の我慢もここまでだった。

「18年前、処分したと言っていましたよね？」

「そうだったかなー？」

「あなたって人はー（怒）」

「まあ、そんなに眉間にしわを寄せて怒らんでも、せつかくのキレイな顔が台無しだぞ。

それにしても、相変わらず嫌味な髪だ。

つやつやでフサフサで…。

長めにしてるのは私へのあて付けか？」

と、悪びれず

頭をツルンと撫でながら言う…。

はあ…。

いつも結局こうなる…。

「コーヒー、飲むだろう？（笑）」

かなわないな、
この人には…。

「18年か…。」

俺の前にコーヒーを置いた教授は
窓の外を眺めながら言った。

18年という歲月。

長いのか…
短いのか…

あの時から俺の時間は止まったままだ。

「もういいんじゃないのか？」

教授はコーヒーを一口飲んで
血糖値が気になるんだがな…
とブツブツ言いながら砂糖を入れた。

「私も年をとった。

そして君もだ、二ノ宮くん。

いつまでも若くない。

そろそろ自分の人生を歩んだらどうだ？」

「…おっしゃっている意味がわかりませんが。」

「いや。わかっているはずだ。」

「…。」

あの写真を置いた意味は？

その言葉と一緒に

コーヒーをゆっくりと飲みこむ。

意味は…

そういうことなのだろう…。

廊下で生徒の音がする。

「久しぶりに昼飯どうかね？」

そんな時間か…。

「またにします。あまり食欲が無いもので…。」

「研究もほどほどにしたまえよ。

結果を急ぐと、ろくなことが無い。

授業も写真部も息抜きと思えばいい。」

「…本気で言ってます？」

「本気だ。」

なぜ、目を逸らす（怒）

外で昼食をとると出て行った教授と別れ
野菜ジュースでも作ってもらおうとカフェに向かった。

それにしても

教授が最後に言ってきたあれは何だ。

「今年、食物学科に入ってきた子でな、
知り合いの娘さんがいて…
白石桃というんだが…」

しきりに頭を撫でている。

「まあ、あれだ…、
気にかけてやってくれ。」

至極、歯切れが悪い。

俺がそういうのを嫌いだと知っていたの話だからか？

白石桃か…。

関わりになることもないだろう…。

午後から

前任の病理学講師と軽く引き継ぎをした。

あまりにもやる気が見られない俺を心配していたが
お互い、上の決めたことに逆らえる立場ではない。

その後、グラスを返しに構内のカフェに寄る。

「二ノ宮くん、夕飯はちゃんと摂らなきゃダメよ。」

常勤している栄養士に釘を刺される。

「良いお相手いないのー？もう、38でしょう？」

また、それが。

面倒な方向に話が進むのを遮るように礼を言う。

あからさまに嫌な顔をして振り向いたとき、

彼女を見つけた。

そうか…。

彼女が白石桃…。

教授から話を聞く前に
とっくに会っていたってことか…。

気にかけるも何も
しっかり守ってる男がいるじゃないか。

幼い顔をして、案外やるもんだな。

そう彼女の事を否定しながらも
運命的なものを感じずにはいらなかった。

あの写真を見て流した涙…

並木道での出会い…

無垢な瞳…

いくつもの符号が
俺を引き戻す…。

捨てたはずの過去…。

めまいを覚えて
屋上に向かった…。

広がる世界〜新田side〜(前書き)

桃色は

FC2ブログ恋愛小説(仮)で毎日連載中の処女小説です

広がる世界〜新田 side〜

なんだよ、二ノ宮のヤツ！

来たのは女子だけだっっていうから
思いつきり気い抜いてきたのにさ。

誰だよ、あの子。

思いつきりど真ん中のジャーニ系じゃん！

しなやかな細い体に

やわらかそうなゆるふわパーマ…。

何？

ブードル？

そうだよ、ブードルちゃんだよ！

かわいい…。

かわいすぎる…。

大体、なんで顧問が二ノ宮なんだよ（怒）

冷徹メガネは趣味じゃないんだよ！

俺はバリタチなんだからさあ。

おじい佐伯、あんなやつ指名すんじゃないやねえよ。

ああ…

あのプードルちゃん、

なんとかなんないかな…。

ぞくっつ…

「う…。」

「どうしたの？優太くん。」

「な、なんだか寒気が…。」

広がる世界〜佐伯side〜（前書き）

桃色は

FC2ブログ恋愛小説（仮）で毎日連載中の処女小説です

広がる世界〜佐伯side〜

「いらっしゃいませー。」

明るい笑顔に迎えられ、年甲斐もなく顔がゆるむ。

「佐伯先生、日替りでいいですか？」

「ああ。お願いするよ。」

いつものカウンターの席に座り、
てきぱきと動く洋子ママに熱い視線をおくる…。

最近の私は

このひと時のために仕事をしていると言っている。

妻を亡くして5年。

久しぶりに感じた胸に高鳴り…。

少しでもここに通うために

面倒なことは二ノ宮くんに押しつけた。(こらっ)

偶然にも娘の桃ちゃんがわが校に入学することになり
洋子ママに近づくチャンスが巡ってきたのだ。

「ママ。桃ちゃんの事、きちんと頼んでおいたからね。」

「あら〜。佐伯先生、そんな事よかったのに。」

「いやいや。かわいい一人娘に変な虫がついちゃいかんだろう。」

「ありがとうございます。どうぞよろしくお願いいたします。」

「何か心配ごとがあれば遠慮なく言ってきたまえよ。」

「これからは夜もちよくちよく寄らせていただ…」

「いらっしやませー。」

「…」

佐伯為雄 56歳。

『きちんと頼んだ相手』が

近い将来、

最凶の虫になってしまつ不運な男。

「ママ、ママ、今日の日替りもおいしいねー。」

穏やかな春の午後だった。

若葉のころ01（前書き）

桃色は

FC2ブログ恋愛小説（仮）で毎日連載中の処女小説です

若葉のころ 01

「桃ちゃん、はいこれ。」

「？」

カフェでお昼をしたとき、
突然、優太くんが紙袋を差し出した。

「僕のお古なんだけど、まだまだ最近のモデルだから。」
中にはかわいいピンク色のポーチと…

「カメラ？」

「うん。デジタルカメラ。」

それは、きれいな緑色のカメラで
私の掌にすっぽり収まるサイズのものだった。

どうして？

っていう顔を優太くんに向けると

「何がいいかなあって悩んだんだけど、
カメラ全然使えないって言ってたし、
これなら細かく教えてあげられるかなあと思って。」

「えーと…そうじゃなくて…」

「愛未ちゃんがね、

夜一緒にお祝いしようって誘ってくれたんだけど、残念ながらバイトでさ。」

ま、愛未、いつのまにっつ！

「来年は必ず参加するからね！」

「うっん！かえって気を遣わせてごめんね！」

「ごめんねはおかしいよ。友達の誕生日を祝うのは当たり前でしょ？」

「優太くん…。」

教室に戻ると、クラスのみんなから口々におめでとつを言われた。

驚いて優太くんを見るとキュっとな片目をつぶってみせる。

緑色のカメラの first shot は
ちよっとピンボケのクラスメイト達。

19回目のbirthday、
一生忘れないよ。

翌日から通常の授業が始まり、
浮足立っていた毎日も
忙しくも落ち着いた日々が変わっていった。

教科書が詰まったバッグの中には
当たり前のように緑色のカメラが納まっている。

「カメラ、気に入ってくれたみたいだね。」

優太くんは
アイスティーをぐるぐるとかき混ぜながら嬉しそうに言った。

「うん 写真撮るのがこんなに楽しいとは思わなかった!」

誕生日から事あるごとにカメラを取り出しパシャっつとしてる。

(めっちゃめっちゃぎこちないけど!)

「わからないことがあったら、すぐ聞いてね。」

「うん」

「メモリーいっぱいになってない？写真は消去してる？」

「メモリー？消去？」

「…（やっぱり）」

それから昼休みは急遽、
デジカメ使い方説明会に…。

「ごめんね。最初にちゃんと説明しとけばよかったね。

そのメモリーカードは4GBあるから、簡単にはいっぱいにならないと思うけど…。

説明書は無くしちゃってるから、ダウンロードして明日持つてくるからさ。」

「ヨンギガバイト？ダウンロード？」

「…（しまった）」

優太くんは時々意味不明な言葉を使います（涙）

若葉のころ02（前書き）

桃色は

FC2ブログ恋愛小説（仮）で毎日連載中の処女小説です

若葉のころ 02

教室に戻るとクラスメイトの水聖みさとちゃんが、

「ねえねえ。二人は選択科目何にしたの？」

と聞いてきた。

食物学科で栄養士を目指していない人は

病理学の授業を一般科目に置きかえることができる。

「えーと。私はそのまま病理学にしたの。」

看護学科の友達と一緒に受けられるから。」

「僕は英語。」

金髪碧眼の女の子も呼べるカフェを目標にしてるからね。」

「そっかあ。いいなあ、桃ちゃん。」

私は将来性を感じて中国語にしたんだけど…。」

そこまで言うと、水聖ちゃんは顔を曇らせた。

「どっしたの？」

「今年、病理学を受け持つ先生がすごいカッコイイらしいのよー

ー（涙）」

「…。」

「…。」

「そうそう。しかも独身！」

「で、若くして准教授になったかなりのやり手ー！」

「…。」

「…。」

他の子も加わって、教室はヒートアップ！

病理学を受ける子はクラスで三分の一程度で

それに（栄養士にならないのに）入ってた私は超ラッキーらしい。

優太くんが彼女を作らないってわかってから

学生生活の潤いを見つげるためにクラス中が躍起になってる。

サークル内や他の学科とのコンパも頻繁にしてるみたい。

（なぜか私には誘いが来ないけど…。）

「失敗したな…。」

優太くんがひとり言のようにつぶやいた。

「え？何が？」

その時、先生がやってきて

答えを聞けないまま授業が始まった。

優太くん、

失敗したなって言ったよね…。

病理学受けたかったのかな？

…

イケメン先生だから？

もしかして!？

優太くんもあつちの世界の人？

若葉のころゝ謎の小部屋ゝ（前書き）

桃色は

FC2ブログ恋愛小説（仮）で毎日連載中の処女小説です

若葉のころゝ謎の小部屋

ここは聖マリアン又大学構内の端の端…

今は使われてない小部屋に

一人また一人と女子が入って行く…。

「どう？おもしろい情報あった？」

「ありましたよ、部長。」

ここは

腐女子が集う知る人ぞ知るサークル部屋。

腐女子という言葉が出来る前から

ひそかに活動を続ける闇サークルである。

何気ない顔をしてクラスに溶け込んでいる腐女子たち…。

その女子たちが学校内のさまざまな情報を持ち込み、

それをもネタにして幹部と呼ばれる数人が同人誌を作っている。

登場人物の名前などは変えてあるが

関係者なら大体想像がつく、かなり際どい内容のため
足がつかないように

発行部数を少なくしてある。

「うちのクラスのプードルボーイは
冷徹メガネの話に謎の反応をしましたよ。」

「ふーん。それだけ？」

「えっ…と…」

漫画や小説のネタになる有力情報を入れた子から
優先的に配布される為、どの子もみな必死だ。

「そうだ！」

最近、そのプードルボーイの周りをうろついている男子がいます！」

「だれ？」

「たしか、写真部の部長です！」

「ああ、アイツね。」

部長と呼ばれる女子はしばらく考え

「うん。いいね。なんか出来そうだよ。水聖ありがと。」

「じゃあ…」

「いいよ。楽しみにしてて。」

「あ、ありがとうございます！tama部長！…！」

「tamaはペンネーム。普段は環でいいから（笑）」

「は、はい。すみせんっっ!!!」

優太、危うし！

はたして、

二ノ宮、新田との絡み具合はいかにっっ!!!

つづく（かも）

若葉のころころ（前書き）

桃色は

FC2ブログ恋愛小説（仮）で毎日連載中の処女小説です

若葉のころ

「えー！？優太がゲイ？ない、ない（笑）」

「そうかなあ…。」

「だってさあ、ゲイだったら女子ばつかの短大に入らないでしょ？」

「そっかあ！そうだよね」

「大体、ゲイだったら何？優太の事キライになるわけ？」

「ううん。変わらないと思う。」

「でしょ？そんなくだらないことで悩まないっ！」

「はーい。」

学科が違うから愛未とは前みたいに会えないけど、
毎日のラブコールだけは欠かさない。

「ところで、その病理学の先生だけど」

「ん？」

「今までずっと研究室に籠ってて、人嫌いの変人って聞いたよ。」

「そっなの？」

「クラスの人は長身のイケメンで将来有望の天才学者だって。」

「ずいぶん違うね。」

「うん…。」

「まあ、明日受けてみればわかるよ。」

「第1講義室だからね、迷わずに来なよ。」

「だ、大丈夫だよー!。」

「まあ!愛未はいつまでも子供扱いするんだからっつ!

「そんな、いつも、いつも迷わないって!」

「はい。迷いました…。」

「ううは、どじゅー……!……! (涙)」

「次の授業は何かな？」

「病理学です。」

「病理学…二ノ宮くんか。よし、一緒に行こう。」

「は、はいっっ！ありがとうございます…！！」

と、喜んだのもつかの間、
急ぐ様子もなくゆっくり歩きながら

「ママの店は何時ごろ暇なのかな？」

「お母さんは休みの日は何してるの？」

「再婚…とかする気ないのかねえ？」

なんて聞いてくる佐伯先生に
若干の焦りを…。

「あ…の、せんせ？授業始まってらんですけどお…」。

「ああ、大丈夫、大丈夫。二ノ宮くんだから。」

「へっっ?」

「ふおふおふお」

ふおふおふおって…

ホントに大丈夫ですか、佐伯せんせ?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0497/>

桃色

2010年10月10日03時22分発行